

## テキストから見るデュルケーム受容

神戸大学 白鳥義彦

### 1 目的

本報告の目的は、社会学の「古典」とされるデュルケームの諸著作、諸理論が、後の社会学者たちによってどのように受容されてきたかということについて検討を行おうとするものである。通常、社会学史といった観点からは、「研究」の側面にまず着目して、研究書の中でデュルケームがどのように取り上げられ、後の社会学者に対してどのような影響を与えたか、といった点に大きな関心が向けられると思われるが、本報告では、「研究」だけではなく「教育」の側面にも注目して考察を行いたい。そのために「テキスト」として、研究書のみならず、教科書も取り上げて分析を行うこととする。これによって、ディシプリンとしての社会学という枠組みの中で、デュルケーム社会学のどのような側面が重要視されてきたかということについても明らかにすることが可能となる。

### 2 方法

そこで、主要な研究書や教科書を対象として、デュルケームがどのように取り上げられているかを分析する。対象とする「テキスト」としては、国内のものばかりでなく、国外のものも取り上げて、時系列的な変化とともに、国際的な比較も試みることとする。

### 3 結果

例えば、早い段階でのまとまったデュルケーム解釈としてとらえることのできる、T・パーソンの『社会的行為の構造』によれば、それ以前の研究者たちによるデュルケームへの関心は、もっぱら方法論的著作に限定されていたとされる。そのために、一般読者はこれらデュルケーム論者のものだけを読んでいるかぎり、論じられている当の人物が同時にまた『社会分業論』や『自殺論』といった具体的なテーマを扱ったモノグラフの作者でもあることすら知らずに終わってしまう、とパーソンズは主張するのである。

近年の日本の社会学の教科書では、人物ごとによる章立てというよりも、テーマごとによる章立ての形式のものが増えてきている。そうした中では、デュルケーム「を」語る、というよりもむしろ、デュルケーム「で」語る、という方向性が強くなることにもなる。例えば、正常と異常についての社会的な決定等、デュルケーム以後の社会学の展開の中でむしろより注目度が高まったような論点が積極的に取り上げられる、という傾向も見て取ることができる。

### 4 結論

以上から、学問としての社会学の展開の中でデュルケームの理論のどのような内容が注目されてきたのかということとともに、むしろ「教育」に着目した観点から社会学をとらえた場合に、受け継がれるべきとされてきたデュルケームの理論の要素も明らかになる。これは、「社会学」がどのように形成され、また継承されてきたか、ということであらためて問い直すことにつながるが、研究対象も広がりを見せ、ともすれば拡散的となりかねない今日の社会学のあり方を再考するためにも、デュルケーム社会学を事例として考察を行う本報告には意義が見出される。

### 文献

国内外の社会学の教科書や研究書を対象とするが、詳細な文献については、報告当日に示す。  
[※本報告は、科研費（研究課題番号 15H03409）の研究成果の一部である。]